

ごめんなさい。僕は代筆屋という女性の人にこの手紙の代筆をお願いしました。だから、まず、ごめんなさい。どうか許してください。僕には手紙を書く力がありません。書ける人の力を借りました。だけど、ここに書かれている文章は、僕の想いをそのまま形にしたものです。最後まで読んでくださるとうれいしいです。

代筆屋さんから文章を手渡され、手紙に書き写しているとき、僕はひめゆりに入所した日のことを思い出していました。スーパーを辞めたばかりの僕は不安だらけで、どうしていいのかわからず心配ばかりしていました。高木さんが優しい笑顔で「ゆつくり覚えていけば大丈夫ですよ」そう言ってくれたから、ずいぶんと気持ちが悪くなりました。

僕は人よりも覚えるのがだいぶ遅いです。

僕は人と話すのが苦手です。

僕は人と触れ合うのが苦手です。

僕は時間を乱されるのが嫌いです。

僕には1人でできないことがたくさんあります。

緑色の障害者手帳を渡されたとき、僕は人とは違うのだということをはつきりと突き付けられました。しかし、僕にも目や鼻や口や手や足があります。格好良くはないですが、同じような顔に体がある。大きな違いはなく、手帳を渡されるまで人と違うことに気づきもしませんでした。僕は変わっていて、他の人と違う。ひめゆりにいる人たちも、同じように。

僕は人を好きになるという感情がわかりません。好きなのか、好きになっていいのかさえ、何一つわかりません。怒ったり、泣いたり、笑ったり、そういった感情はたぶんみんなと同じようにあります。だけど僕は障害等級3級の障害者なのです。僕は中々普通の仕事に就けません。僕を遠目で見ながら笑う人もいます。ほんの少しの違いをこの世界は認めてくれません。高木さんは健常者ですね。他の人と同じように。それは幸せて僕らは不幸せ。多くの人と違うことは悪いことでしょうか。

僕にはわかりません。もし、人を好きになることに健常者という資格が必要であるならば、僕は生まれたときから人を好きになる資格がないということでしょうか。

だとすれば、この感情はなんですか？高木さんの声を聞くと、心臓がドキッとします。時々、チラシの枚数がわからなくなつて困ります。高木さんの笑顔を見ると嬉しくなります。顔がにやけて汚れた歯を見せてしまうのが恥ずかしいです。

僕にはわかりません。みんなと同じように難しいことを考えたくても、生まれたときからそれができないのです。

お父さんにも、お母さんにも、妹にはいまだに苦勞をかけています。家族が離れ離れになったのはきつと僕のせいです。妹には悪いことをしたなと思っています。いまだに妹に食べさせてもらっています。妹なしでは僕は生きることさえできないのです。本当に申し訳ないと思つています。

最後に3つの質問があります。

「僕はどう見えていますか？」

「好きという感情？」

「世界に僕は必要ですか？」

教えてください。僕の不安なのです。